

## 文芸批評から社会批評へ

——ケネス・バークのコミュニケーション論について——

## I

最愛の娘の口から出たことばが「無」であったことに対し怒りをこらえた老王が「無から生ずるものは無だけだぞ」とたしなめ再度の返答を待とうとする時、彼の発言それ自体は真実をついていたのではなからうか。だが、彼の誤ちはその目に映じた無が無ではなかったことにある。

シドニー・フックのケネス・バークについての評言は一度でもバークの著作にふれたことのある者なら、バークを積極的に評価するものであらうと、消極的に評価する者であらうと、我意を得たりと賛意を表したくなる、そうした類のものである。何処での発言かは不明であるが、ある雑誌での引用によれば次のようなものである。——「バークを読む者の最大の困難は彼が何を言わんとするのかを見出すことである。」<sup>(1)</sup>

だが、もしもバークが少なくとも何かを語っているのだとしたなら、たとえ眩惑と誤謬に満ちたものであったとしても、それは無から生じたものではあり得ないはずである。その無ならぬ源をつきとめること、これがこの小論のそもその狙いである。

この源をつきとめる為の考察の範囲は自ずと今世紀二十年代から三十年代の彼の思索、つまり彼の最初の二つの著作となる。が、こう限定しても、そこにおいて取り上げるべき重要なトピックは多い。ここではそのなかで最も中心と思われるトピック——彼のコミュニケーション論を取り上げる。そしてこのトピックについて取り上げることによってそれから後のバークの思索の源を明らかにしようと思う。とは言え、このトピックはそれが中心的なものであるが故に、もし正確に描き出そうとするなら説明を要する数多くの点を抱えている。しかしここではそれら全てにふれる余裕はない。従って、これから描こうとするのはその輪郭に過ぎない。

またこの時、ふれずには済ますことのできぬ人物も多い。既成の思想を吸収し批判しつつその思索を進めるのが思想家の常であるとするなら、バークもそのうちのひとりであった。バークに影響を与えた思想家のうちでおそらく最も重要な人物はジュレミー・ベンサムとオグデン・リチャーズである。彼らのバークへの影響は主としてその言語分析にあった。ここではベンサムのみを取り上げることにする。

以上が始めるに当たってのことわりである。

## II

バークがコミュニケーション論を展開しているのは『恒常と変化』<sup>(1)</sup>においてであるが、そもそもこの本の原題は「コミュニケーション論」であった。この題名変更の理由は、この原題が電信 telegraphy についての教科書風の響きをもつとの出版社側の反対があった為であるという。<sup>(2)</sup>

他方、我々がコミュニケーションを「伝達」とだけ捉えた場合もまたバークのいうコミュニケーションの意味を「伝達」し損なう可能性がある。すなわち、バークはコミュニケーションという用語を様々な意味を込めて使用しているが、我々が日本語で「伝達」と翻訳してしまった場合、なかでも彼がこのことばで描こうとしている、あるいは

イメージしている全体的枠組を見落としてしまう可能性が高くなるのである。

平凡社の『哲学事典』に次のような説明がある。

コミュニケーションはラテン語の *communis* つまり *common* からきている。人間はコミュニケーションする時、誰かと「共有なもの」 *commonness* をうちたてようとしており、情報、思想ないし態度を共有しようとしているといえる。<sup>(3)</sup>

まず、ここで注目しておきたいのは、人間が他者と共有なものを打ち立てようとするという点である。が、パークがコミュニケーションという時、その視野は広く社会全体にまで及んでおり、社会全体における「共有」ないしは「共同」が意識されている。つまり、パークにとって *communication* という用語は *community, communion* といった倍音が伴っているのである。<sup>(4)</sup>

パークはコミュニケーションにおける言語の役割・機能を次のように二つに区別し論じている。

我々は発話のコミュニケーション性 *communicativeness* における二つの機能を識別し得る。発話は感情の共通基盤を提供するという意味においてコミュニケーション性をもつ。また、発話は行為の共通装備として役立つという意味においてコミュニケーション性をもつ。<sup>(5)</sup>

パークはこの言語の役割が調和している典型例を未開社会にみている。

未開社会では、これら二つの機能はほぼ一致している。すなわち、ある部族に固有な言語の感情的含みは、その部族が生活を営み存続するために必要な種類の行動を刺激しているのである。その部族の敵をあらわすことばは邪悪の含みを持ち、その含みは敵に立ち向う為の団結を促すであらう。また、その部族の目的をあらわすことばは好意的な含みを持ち、まさにその同じ目的を永続させることであらう。<sup>(6)</sup>

部族は既にまとまったコミュニティである。そこにおいては敵を指し示すことばはその敵に対するコミュニティ全体の一致した感情を含んでいる。と同時に、逆にそのことばを共有していることは、すなわち、敵に対する感情を共有していることである（感情の共通基盤）。そしてまた、そのことばは敵に対する感情を含むが故に、その敵に対する行動を促すと同時にそのことばが共有なものである限り団結を促すであらう（行為の共通装備）。これがパークの指摘である。

以上は社会に既存する言語が如何なる機能を有しているのかという観点からの考察である。ここで明らかになったのは、言語が単に対象指示の機能を有しているばかりではなく、良きにつけ悪しきにつけ、感情（倫理的道德的判斷）を含み、従って行為を促す機能を持ち合せていることである。<sup>(7)</sup>次に異なった角度から、つまり、今の考察は「共有なもの」が既に打ち立てられている状態においてその「共有なもの」（言語）を考察したわけだが、今度はこの「共有なもの」を打ち立てようとする行為としてのコミュニケーションとは如何なるものなのかという視点から考察してみよう。

この場合も次のことは既に明白である。コミュニケーションを考える時、発信者と受信者の二項を設定し、この両項の間で伝達されるものが何かと問われた場合、通常、情報をその位置に置くことが多い。あるいはまた、コミュニケーションとはそもそも両項の間での情報（知識）のギャップを前提とし、それを埋める為の情報伝達の行為と言わ

れることもある。が、このようなコミュニケーション観程パークの考えるコミュニケーション論に反するものはない。すなわち、コミュニケーションの媒体としての言語は単に情報を伝えるものとしての機能を有しているばかりではなく（もちろんパークはそれを否定しはしないが）、我々の感情や行動のプログラムを伝達する機能を有しているのである。そしてその伝達が成立、すなわち「共有」された時、そのことばは社会における感情ならびに行為の共通基盤として機能し、「共同」もしくは「協力」が成立することとなるのである。行為としてのコミュニケーションは、このように、逆に「共有」を確立し、「共同」もしくは「協力」を成立させようとする積極的な行為となる。

それではこのようなコミュニケーション行為とは如何なるものなのか。この問いを考える上で是非とも参照しなければならぬのは『恒常と変化』に先立って書かれた『反対陳述』に収録されている「レトリック用語集」と題された論文<sup>(8)</sup>である。

『反対陳述』は一九三一年に公開された文芸批評の書であり、「レトリック用語集」という論文はこの書にみられるパークの初期の批評理論（思想）の概況となっている。次の引用は文芸批評家としてのパークについて語られる時しばしば言及される箇所である。

文学における形式とは欲求をかきたて充足するものだ。作品のいち部分が読者に他の部分を期待させ、その結果、読者を満足させる限りにいて作品は形式をもつ。<sup>(9)</sup>

この形式という概念はパークの思想を考える上で重要であるが、やっかいなことに使用される文脈に応じて様々な意味を充填されるといった極めて多義的な概念である。ここではそうした問題に立入るつもりはない。ここで確認しておきたいのは、彼が文学作品を読者との関係において捉えているということだ。パークは作品をそれ自体自律した

存在とだけ捉え、ただそのみを他の要因と切り離し考察対象となすことはしない。作品はその成立過程を前提とする。そこにはまず作者が存在しなければならぬ。従って、当然そこには作者の経験とそれに伴う感情・態度・思想等が必然的に介入する。また、作品は読者を予想する。作品とは読者に対し積極的に働きかける存在であり、作者の望む効果を読者に対し生ぜしめることを目的としてもつ。とは言え、作品は読者と読者というふたつの要因に還元し尽くせるものではない。バークはそうように考えているのでもちろんない。作品はその両者の間で相対的独自性のある存在である。

バークのこうした着眼は常識的観点からいって当然といえれば当然であって、何もとりたてて言う程のものではないかもしれない。だが、まず第一に、文学史上この時期のバークが極端な作品の自律論を唱え、それ故「形式主義」と呼称されるニュークリティシズムの一員とされている(いた)ことを考えてみるなら、この着眼は注目し値すると言える。また、バークの後の思想的発展をみていく上で、ここでの論述に関して言えば、コミュニケーション論との関連において極めて重要である。すなわち、先に提示した発信者と受信者という二項と照らし合せて考えるなら、作者は発信者に、読者は受信者にそれぞれ該当し、更に作品はコミュニケーションの媒体としての言語に相当する。文学、特にその最高形式である詩は、バークにとり、作者の読者に対するコミュニケーション行為に他ならないのだ。逆に言えば、バークのコミュニケーション論は文芸批評家としての彼の、文学(詩)についての批評理論とその成果をその発想の源としているのである。

さて、作品が作者の読者に対し望む効果を生ぜしめることを目的とするという視点をとった時、問題となるのは如何にして読者に対しその望む効果を実現するかである。バークはそれを「読者が望ましいと考えること」に訴えることだと言う。

芸術家が読者の欲求を操作しようとする時、彼は読者が望ましいと考えることを利用するのである。もし読者が一夫一婦制とそれにまつわる規約 code を信じているとしたなら、詩人は『オセロー』のような作品を書く時この信念を利用することができるのだ。<sup>100</sup>

一夫一婦制とそれにまつわる規約が存在し観客がそれを信じていなかったとしたなら、オセローの行動はそれを見る彼らにとって不可解であったに違いない。それらあってこそ『オセロー』はドラマとして成立し、また同時に、観客に対しアピールするのである。そしてまた、作者の側からすれば、逆にそれらを利用することによって作品を成立せしめ、と同時に読者の欲求をかきたてそれを充足させるのに成功し得ているのである。

バークは「読者が望ましいと考えること」を今みたように「信念」と言い換えているが、更に「イデオロギー」とも「文化」とも換言している。

イデオロギーによって意味されるのは、芸術家が効果を得る為に利用することのできるもろもろの錯綜した信念や判断の集まりである。イデオロギーは個人から個人へ、時代から時代へと変化する。だが、イデオロギーの一般的受容やその安定性が個人個人あるいは時代時代の変化よりも強調される限りにおいて、イデオロギーは「文化」である。<sup>101</sup>

社会にはある一定の信念や判断の集まり、「イデオロギー」が既存している。それらは通常、反省的思考の対象とはならず、我々の日常的な生活や行動の動機づけとなったり、あるいは思考や価値判断の基準ないしは前提となっているのである。我々はそれを社会的通念、常識あるいは習慣と言い得るかもしれない。それらは社会に既存する価値

観の集合体である。

コミュニケーションの成立はこの「イデオロギー」に如何に訴えるかにかかっている。

ところでここまで読み進んだ者がおそらく気づくであろうことは、ここで登場してきた「イデオロギー」という概念がこうして改めて紹介されるまでもなく既に暗示的に述べられていたということである。先に未開社会の例を引き合いに出し社会に既存する言語が如何なる機能を有するかを述べた。そもそもそのような言語が既存し、しかも既に指摘された如き機能を持ち合せているということは、その社会においてある一定のイデオロギーないしは文化が確立されているということであって、それを前提としていなければならない。換言すれば、社会において共有されたものとしてのことばは、それが既に社会的共有物であるところからみて、そしてまたそうしたことが感情（倫理）を含むという点からみて、社会的な感情―イデオロギーを反映しているということになる。この意味でイデオロギーとは言語体系である。あるいは言語体系とは社会に既存するイデオロギーの写しである。

だが、このように言ったからとて、イデオロギーが不変で一定の体系であるという意味ではもちろんない。ある特定の時代においても社会に既存するイデオロギーの内容は多様である。

イデオロギーはもろもろの信念や仮定 *assumption*（既に当然だと思い込んでしまっていること）が調和している構造体ではない。つまり、その信念のうちのあるものは他の信念と対抗しており、また、その規範 *standard* のうちのあるものは我々の性向 *our nature* に対抗しているのである。イデオロギーは相容れぬ類の行為を正当化しようとして互いに全く反目し合っている信念の集合体である。<sup>52</sup>（カッコ内筆者）

パークは引き続き次のように述べている。



従って、芸術家の経験の型は彼が特定し強調するイデオロギーのうちにあらわれているだろう。ある仮定や信念を妥当なものとして受け入れている時、彼はそれらを自らが妥当でないと思なしている他の仮定や信念を失墜させる為に利用することになる。たとえば、個人の尊厳についての仮定を利用することによって、国王に対しては異議を差しはさまずに絶対的に従順でなければならぬという仮定を覆そうとするのである。<sup>13</sup>

かくしてコミュニケーションは極めて積極的な説得の行為となる。すなわち、コミュニケーションしようとする者それぞれの「経験の型」<sup>14</sup>——経験に根ざす、その者に特徴的な感情・態度等——に関連した利害、意図、目的に適合する社会的信念（イデオロギー）に訴え、その者の意図に不都合な敵対する社会的信念に対抗し変更を迫ろうとする社会的な行為である。それは同時に、対抗の的となる信念を保持し、それに基づいて行動する者に対し反駁を加え変更を迫ろうとする説得の行為である。そしてこの時、この説得はその者の持つ別の信念に訴え共感を得ることにより成就される。

が、ここで注記しておかねばならないのは、この行為の実質は言語であるということだ。言語は個人的な側面と社会的側面とを同時に有している。すなわち、まず第一に「象徴は経験の型に平行する言語的相似物である」<sup>15</sup>。他方、言語とは社会に既存する体系であり、同時に、価値の体系、つまりイデオロギー（信念）の写しである。両側面は不可分に関連しコミュニケーション行為においてその役割を果たしている。たとえば、あるものを「敵」とか「友人」（ないしはその多様な同義語）と呼ぶ時、その命名行為において既に我々はその者に対する個人的態度や感情を表明していることになる。他方、こうした語彙は社会に既存する言語体系から選ばれたものであり、従って、イデオロギーのうちの特定の信念を選択しているのである。このような本性を持つものとしての言語こそがコミュニケーション行為の実質をかたちづくり、その機能を果たしているのである。

パークは社会におけるコミュニケーションの問題を芸術家（詩人）のその作品を通してのコミュニケーションの問題として捉えた。そしてこの着想こそ彼の発言を特異なものとして際立たせることになるのである。

ここにおいてパークの言うコミュニケーションは説得の術としてのレトリックの相貌を現わしてくる。だがそれは人を欺く策略として考えられているのではない。他者との共感のうちに社会的・一体的 identity を得ること、これがパークの考えるレトリックであり、彼の考える理想的コミュニケーションの姿であった。

だが、このようなコミュニケーションが悪しき一面を持つのも事実である。

このような発話（以上述べてきたコミュニケーションにおける言語）は非常に党派的である。そして中立的語彙の計画を明確に打ち出したベンサムが排除しようとしたのは、発話のまさにこの党派的性質なのである。Ⅲ（カッコ内筆者）

次に考察するのはベンサムの言語分析とそこから帰結される中立的語彙確立の試みである。

### Ⅲ

今日、哲学事典や一般的哲学史の類をひもとく時、そこでは主として「功利主義の始祖」「最大多数の最大幸福」「快樂計算」「社会改革者」といった項目がベンサムについては語られているだけで、彼の言語分析については語られていないのが実状である。だが、科学と文学・芸術の価値との間に首尾一貫した関係を見出すことを中心的課題として捉えたひとりの科学批評家が、歴史における登場人物の「文体」を通して知性の歴史を書き留めようとする時、ベンサムの言語分析についての評価は次のようなものとなる。そしてそれはベンサムを彼の言語分析を通じて理解す

るパークのベンサム評価との著しい類似性をみせている。

ベンサムの真の急進主義は、議会の改革を支持する彼の著書の中にはなく、またおそらく彼の経済的自由主義の中にもなく、彼が切り拓いた「新しい道」の中にこそあった。彼が急進的であったのは、彼が法律の根本だけでなく、言語の根本にまで掘り下げていったがゆえである。そして言語の根本にまで掘り下げていったがゆえに、彼はあらゆる人間の思考の根本にまで掘り下げていたのである。彼の著書には、「言語の暴君」とか「言語の曖昧さ」とかに対する嘆きの声がたえず溢れている。彼はつねに「新しい道」「新しい方法」、そして「新しい学問（科学）」に訴えて、「言語の暴君」を打ち破ろうとした。<sup>11)</sup>

パークはこうしたベンサムの「言語の暴君」を打ち破る試みを『行為の源泉についての図表』<sup>12)</sup>のなかにみる。

ベンサムは、そこにおいて、人間を動機づける根本的要因である快楽 *pleasure* と苦痛 *pain* を十四のカテゴリーに分類し、更に、それぞれのカテゴリーの動機をあらわす名称を、「中立的 *neutral*」と「検閲的 *censorial*」という二種類の用語に基いて分類している。そして検閲的名称は、更にふたつに下位区分され、それぞれ「称賛的 *eulogistic*」「非難的 *dyslogistic*」と呼ばれている。

この図表の詳しい検討はここではできないが、ベンサムの考えにふれる為に以下少し具体例をあげておく。

第一のカテゴリーには「味覚に対する関心 *interest of the palate*」が割当てられており、この動機をあらわす名称が次のように分類されている。中立的名称に該当するのは、「空腹 *hunger*」「食物の必要 *need of food*」「食物の不足 *want of food*」等である。称賛的名称は、「人々と共に楽しく食卓を享受することへの愛 *love of pleasure of the social board*」「楽しくいっしょを食べることへの愛 *love of good cheer*」等であり、非難的名称は「貧欲 *gluttony*」

「大食漢 voracity」「がつがつした gormandizing」等となっている。また、六番目の「覗き眼鏡の関心 interest of the spying glass」の場合、中立的名称——「好奇心 curiosity」、称賛的名称——「知識、文学、学問（科学）への愛 love of knowledge, literature, science」、非難的名称——「でしゃばり impertinent」「おせっかい meddlingness」等となっている。<sup>(3)</sup>

ベンサムが目「暴君」と映じた言語とは、今述べたうちの検閲的名称——称賛的ならびに非難的名称——に他ならない。『行為の源泉についての図表』に先立って書かれた、いわば彼の主著とされている『道徳および立法の諸原理序説』<sup>(4)</sup>のなかでベンサムは次のように言っている。

……しかし不幸なことには、ひとつの動機についてその名称がその動機を正しく表現し、それ以上のものを表現しないような場合に出会うことは、まれなのである。ふつうに動機の名称には、その動機にある性質を負わせるような主張が暗々裡に含まれている。……

そのことばがよい意味に用いられる場合に、必然的に意味されるのは次のようなことである。すなわちそれは、そのことばが意味する対象の観念と結びついて、是認の観念、すなわち、そのような対象を考えて、そのことばを用いる人々によっていられる、快楽または満足の観念を伝えるということである。同様にそのことばが悪い意味に用いられる場合には、必然的に意味されるのは次のようなことである。すなわち、そのことばが意味する対象の観念と結びついて、否認の観念、すなわちそのような対象を考えてそのことばを用いる人々によっていられる、不愉快の観念を伝えるということである。<sup>(5)</sup>

すなわち、ベンサムが暴いてみせたのは、動機をあらわすことばには、そのことばの使用者の倫理的ないし道徳的

判断が暗黙のうちに含まれている傾向があるということである。先の例に即して言えば、「楽しくごちそうを食べることへの愛」も「貧欲」も「空腹」という「味覚に対する関心」をあらわす名称に他ならないが、前者はそのことばの使用者の肯定的倫理的判断ないしは喜ばしい良い意味を、後者は否定的倫理的判断ないしは悪い非難の意味を既に含んでいるのである。ところがこうした判断が下される根拠はあらかじめ明らかにされてはおらず、従って未証明の道徳的仮定に過ぎない。<sup>16)</sup>あるいはそのことばの使用者の単なる先入見・偏見に過ぎない。が、それらのことばはそのまま使われることによって、その付加の意味を他者に伝えてしまうのだ。次の引用は『行為の源泉についての図表』からの引用であり、バーク自身『恒常と変化』で引用している箇所でもある。

形式をふまえず仮定の力をもつが故に、またその対象として、しかも極一般的にはその効果として、聴者あるいは読者の側にも同様の仮定をもたせるが故に、問題のこの種の主張（検閲的名称によってなされる主張）は、如何に誤って根拠づけられていようと、このように仮面にかくされている時には、単純かつそれ自身にふさわしい形式をふまえて表現された時よりも、より説得的である傾向があるのである。特に検閲の性格に興奮した主張の性質と傾向を付け加えた場合、その種の主張は、あたかも伝染病のように、それが示唆する感情を宣伝する傾向があるのである。この時、この種の主張は一般的意見のなかに支持を求めると同時に、そのなかに支持を見出しているのであり、称賛のないし非難の意味は、このように、あたかも粘着物によってかのように、名称の意味と結びついてしまっており、その一般的意見が存在する証拠として働いているのである。<sup>17)</sup>（カッコ内筆者）

以上から明らかなように、ペンサム暴露する言語の性格はバークの描くコミュニケーション論における言語の性格に他ならない。すなわち、検閲の名称に含まれる未証明の道徳的仮定は、それがコミュニケーションの過程におい

て果たす役割という観点からみた時、そのことばの使用者（発信者）の道德的假定を含むばかりではなく、それがそのまま伝えられることにより、聴き手ないしは読者の側（受信者）にも同じ假定、つまり、そのことばの指示する対象について使用者が抱くのと同じ感情（倫理的判断）を抱かせてしまうのである。また、この時、検閲的名称はその判断の根拠となる一般的意見（イデオロギー）を指示し、それが存在する証拠として働くとともに、同時にその判断の妥当性は自らの指示する一般的意見の存在に逆に支えられているのである。

ベンサムにとってこのようなことばの性質は欠陥以外の何ものでもなかった。それは虚偽とかかわり、なによりも攻撃の道具に他ならなかったのである。

おのおのの行為の源泉、そして特に快楽と動機に適用されることによって、これらの検閲的で感情をふきこまれた名称は、ことばの戦いにかかわる攻撃の道具の少なからざる部分を形成しているのである。邪悪な利害、sinister interest と利害を含む偏見に導かれ、これらの名称は、すべての階級の論争家たちによって——政治家、弁護士、神について異説を唱え論争を挑む者、風刺家、そして文書検閲官といった連中によって——虚偽ないしは人を欺く道具の役割に従事させられてきたのである。<sup>(8)</sup>

また、ベンサムにとり、検閲的名称の指示する一般的意見（イデオロギー）の存在は虚構に過ぎなかった。いや、それ以前に、ことばの指示する対象が実体をもたないなら、それらは単なる虚構に過ぎぬというのがベンサムの信ずるところであった。

見出し語としてここに掲げられたことばの数々（つまり動機をあらわすことば）は、非常に多くの心理的存在の名

前であるが、そのほとんどが虚構であり、言説の必要性によりかたちづくられたものである……

習慣によって人間はある名前をみた時はいつも、それに対応する対象を思い描くよう仕向けられ、その名前はその対象が実在する証として、あたかも当然であるかのように、そのものによって受け入れられるのである。(9) (カッコ内筆者)

ペンサムはこのような暴君としてのことばを排除し、それから自由なことばを求めようとした。これがペンサムの言う「中立的名称」であった。「中立的名称」にあつては、そのことばの使用者の未証明の倫理的判断は含まれない。なんら倫理的判断を伴うことなく対象を指示するのみである。また、対象を中立的に指示していたとしても、そのことばが虚構を指示し支持するものなら、当然のことながら排除の対象となる。それは我々の正しい思考を妨げる悪しき要因なのである。

ここにおいてペンサムとバークとの立場の相違をはっきりと見て取ることができる。

ペンサムの「中立的語彙」を理想とする背景にあつたのは、言うまでもなく、一七世紀のニュートン力学を頂点とする科学的方法の勝利であった。そしてペンサムは、自然を説明する科学的方法を政治・法律・道徳の分野に適用し、そうした諸分野における科学を確立させようとした。ペンサムの野心は自然科学に占めるニュートンの位置を精神科学において占めることであつた。この時、自然科学における数学に相当するものがペンサムの目指す「中立的語彙」であつた。また、ペンサムの目的地はいわゆる「真理」にあつた。その場合、言語はその真理到達の為の道具に過ぎない。言語に求められたのは数学の如く厳密で正確な機能であつた。

だが、こうしたペンサムの試みが言語のなからその自然な性質を切り捨ててしまうことになるのは必然であつた。ペンサムの切り捨ててしまうもののなかにこそ、我々が日常使用する言語本来の姿があるのだ。ことばが虚構を

指示しその存在の証拠となるという指摘はそれはそれで正しいと言ひ得る。だが、『幻想それ自体は、その幻想の生起により現実の物理的事象が引き起こされるという意味において実在的 Real である』<sup>10</sup>とバークは言う。ペンサムが言語を突抜けたところに存在する「真理」を探究するのに対してバークは言語それ自体の「事実」を考察の対象とする。つまり、現実の社会において日常使用されるものとしての言語——そうした言語が人々を欺き、虚偽に導き、たとえ「暴君」であろうとも、それらが言語的事実である限り、また、我々の社会で現実用いられ、我々の社会での営みをかたちづくっている限り、バークはそれらを積極的に評価し、考察の対象とするのである。

バークはペンサムに代表される科学（的方法）への絶対的確信（信仰）とそれにもとづく「中立的語彙」の確立の試みに対しはっきりとした反対の立場を表明する。バークのこの反科学の立場は彼の思想の根本ならびにその獨創性にかかわる点であり、しかも極めて微妙な問題をはらんでいるので本来ならば詳細に検討すべきところであるが、残念ながらここではその余裕はない。従って、以下のことを確認するに留めておく。

まず、バークが反科学を表明しているといっても、それを完全に否定し去っているわけではない。バークは科学的方法の有効性を限定して捉えているのだ。すなわち、科学はその方法の性質上、必然的に、人間の意図・目的ならびに価値的なものをその考察の範囲から閉め出してしまい、従って人間諸関係ならびに人間の行動を考察する為の有効な方法たり得ない、というのがバークの信ずるところであった。仮に科学的方法によって人間の行動について何らかの法則が明らかになったとしよう。しかし、その方法のうちには倫理的評価の基準は含まれ得ない。もしもその法則に則つてある人間の行動やその動機に関し何らかの倫理的判断がなされたとしたなら、その判断自体、科学的考察範囲の外部から加えられたものであり、従つてそれは科学的営為からの逸脱となる。だが、我々が人間の行動やその動機について語ろうとする時、倫理的道德的要因に触れないことが果たして可能であらうか。以上がバークが科学に對し反論する時のおおまかな骨子であると考えられる。



他方、ベンサムは「中立的語彙」のレベルで考えればまず次のように言える。ベンサムは「中立的語彙」によって人間諸関係についての科学あるいは精神科学を樹立しようとした。だが、その「中立的語彙」が排除しようとするものこそ人間を動機づけ社会の営みを形成しているのだとしたならそうした言語で記述され得る「真理」とは如何程のものであるのだろうか。

パークはベンサムの「中立的語彙」確立の試みを「神秘主義的」と批判する。<sup>103</sup>この例の独特の言い廻しで彼が言わんとするのはベンサムが考える意味での「中立的」なことは現実には存在し得ないという主張である。<sup>104</sup>まず、ベンサムが「中立的」と考えることは自体ベンサムの生きた時代のイデオロギーの写しとなっているという事実が彼の試みへのひとつの反証となり得るであろう。(たとえばベンサムが取上げた「金銭上の関心」はそれ自体、如何なる中立的名称で呼ばれようと当時の中産階級のイデオロギーの写しとなっている。) 第二に、ベンサム自身「中立的名称」の使用を遵守するどころか自らの「最大多数の最大幸福」に奉仕する動機に出会った時、それに対し称賛的名称を与えているという事実もある。第三に、よしんばベンサムの言う意味での「中立的」なことが存在し得たとしても、そのことは容易にレトリックの道具となり得るという事実である。<sup>105</sup>あるいはこうも言える。そうしたことを用いることによっていわゆる主観から自由な純粋に客観的な探究がなされ得て何らかの法則なり真理なりが発見されたとしても、それらの成果を利用するのは人間——意図を持ち行為するものとしての人間であって、従って、その利害に奉仕するレトリックの道具に容易になり得るのである。

以上を踏まえたパークの主張は次のように集約して語り得るだろう。科学的探究はそれ自体社会的営為の一部を形成しそのなかに組み込まれているのであって、決してそこから超越した特権的地位にあるものではない。科学の生み出す成果は容易にそれを利用する人間の意図に容易に奉仕させられ得る。とするなら問題とすべきはその人間の意図でなければならない。ところがその科学によってではそうした人間の意図は評価し得ない。何故なら科学が科学たり

得るのはまさにその人間の意図・目的をその視野から排除する点にかかっているからである。<sup>14</sup> ここにおいて科学にかわる別の視点が必要とされることになる。

ところで、バークはベンサム科学に対する絶対的信頼とその「中立的語彙」確立の試みに反対する一方で、彼の言語分析の成果については積極的に評価している。つまりベンサムの「暴露」はバークが自らの考えるコミュニケーション論を語る上で皮肉にもそのまま利用し得る典拠となるのである。バークはこのベンサムのあずかり知らぬコミュニケーション論（レトリック）への寄与を次のような言い廻しで評価する。

ベンサムが発見したのは我々の発話そのもののなかに（上質のものではないが）詩が暗黙のうちに含まれているということである。というのも我々の用いることは、我々や我々の聴者に対し、その背後にある感情の泉を汲出すことにより、作用するからである。<sup>15</sup>

科学にかわる別の視点とはこの「詩」の視点に他ならない。そしてこの視点のもとになされたものこそバークの言うコミュニケーション論なのであった。

#### IV

さて、以上を取り纏める意味で、何故「詩」であるのかという問いをここで改めてたててみるなら次のように言えよう。すなわち、詩人が読者（社会の成員）とのコミュニケーションをそのイデオロギーに訴え、共感を得、その感情に作用することを通じて成し遂げるのとまさにその同じ過程をふんで我々もまたその日常生活においてコミュニケーション行為を行なっているのである。そしてこの時、詩人の用いることばも我々の用いることばも、同じ詩的

検閲的Ⅱ未証明の道德的假定を含み行為を促すことばであって、両者ともにそれを通じてコミュニケーションするのである。<sup>(1)</sup> この意味で「全ての人間は詩人である」とパークは言う。

だが厳密にはその両者は一致しない。パークはこの両者のアナロジーの有効性を説いているのである。——「個人と集団との関係はそれに対応する作者と聴者との関係と照らし合せることによってうまく解明されないだろうか。」<sup>(2)</sup> パークは『恒常と変化』を締め括ろうとするに当って次のように言っている。

我々の主張から引き出すべき結論は次のような信念である。つまり、世界ならびに世界に対する人間の諸関係を論ずるための究極のメタファは、詩ないしはドラマのメタファでなければならないという信念である。<sup>(3)</sup> 多くのメタファが可能である。……（だが）我々が示唆したいのは、詩的あるいはドラマ的人間というメタファがそれら全てのメタファを包括し、それら全てのメタファを超えていくことである。

……芸術と同様、社会生活は、アピールの問題であるから、詩のメタファは実際の行為のあらゆる様態を記述する為の貴重なヒントを我々に与えてくれるであろう。それら実際の行為の様態はあまりにしばしば功利性という単純なテストによって測られ、コミュニケーション・共感・慰撫、propitiation といった要因との関連で測られることがあまりにも少ないのであるが、これら要因はジャンルとしての芸術でなされるあらゆる手続のなかに明確に存在していると、我々がたまたま芸術と呼んでいない生という非公式の芸術のなかにも等しく存在していなければならないのである。<sup>(4)</sup>（カッコ内筆者）

パークはこの視点を手に入れることによって、それを新たな出発点となし、あるいはその視点自体を内省して、それから後、彼の方法論たる「ドラマティズム」、それを支える「象徴行為」の概念など彼独自の思弁的考察を展開し

ていくことになる。そしてこの時、その考察の中心を占めているのは、この小論において述べた意味での言語であり、従ってこの時、行為するものとしての人間の意図・目的・利害等、価値にかかわるものがバークの視野のなかにしっかりと納められているということは言うまでもない。

## 註

### I

- (1) Ben Yagoda, "Kenneth Burke," *Horizon*, June, 1980, p. 66.

### II

- (1) Kenneth Burke, *Permanence and Change*, (1935; revised ed., 1954; University of California press, third ed., 1984). 尚、ナキスマは第三版を使用。以下 PC と略記。
- (2) Burke, *Counter statement*, (1931; University of California Press, 1968), p. 214. なお以下 PC, p. xviii. 参照のこと。
- (3) 『哲学事典』(平凡社)五〇九頁。
- (4) その「Communism」をも、バークの共産主義への共感ならびに第一回全米作家会議での発表とその反響については Daniel Aaron, *Writers on the Left*, (Oxford U. P., 1973), pp. 287-292. を参照のこと。バークの思想を考える上で大恐慌後の三十年代合衆国の社会状況、特にこの literary war を見落とすことはできない。
- (5) PC, pp. 175-176.
- (6) PC, p. 176.
- (7) これが未開社会に限定されないことは太平洋戦争下の日本国内における「非国民」、マッカーシー旋風下の合衆国での「共産主義者」ということを想起してみれば容易に納得がいく。

- (8) Burke, "Lexicon Rhetoricae", *Counter statement*, op. cit. フォー CS と略記。
- (9) CS, p. 124.
- (10) CS, p. 146.
- (11) CS, p. 161. コッでいわれているイデオロギーは虚偽意識としてのそれではない。ハークは『反対陳述』以降、このことばを表立って使用しなくなるが、たとえば『恒常と変化』では "orientation" "Weltanschauung" 等の用語によってその概念は継承されている。「イデオロギー」ということは、「非難的名称」として使用される風潮からハークがこのことばの使用を止める事情がこころな PC, pp. 303-304. を参照のこと。
- (12) CS, p. 163.
- (13) CS, p. 163.
- (14) コッ "pattern of experience" とこころな CS, pp. 149-152 を参照のこと。cf. PC, pp. 5-18.
- (15) CS, p. 152.
- (16) 「……彼(詩人)は、彼ら(社会の成員)の用いるのと同じ道徳的負荷を用いて自らが属する集団と道徳的一体感を確立した時、コッニケイトしたのだ。」(カッ内筆者) PC, pp. 177-178. コッ identity の問題は identification の問題として『動機の内ナリック』における中心的課題となる。Burke, *Rhetoric of Motives*, (1950; University of California Press, 1969). フォー RM と略記。
- (17) PC, p. 177.

### III

- (1) J. Bronowski & Bruce Mazlish, *The Western Intellectual Tradition*, (1960; Harper & Row, 1975) p. 442. 註三田村他訳『ヨーロッパの伝統』(みすず書房、昭和四十四年) 三三七頁。
- (2) Jeremy Bentham, "A Table of The Springs of Action", *The Works of Jeremy Bentham*, vol. 1, (Russell & Russell, 1962). 尚、付加すべきは、この論文はハークのベナムの読解を主として『恒常と変化』に限定してなる。

が、『動機のレトリック』においてもほぼ同様の内容のベンサム読解がなされている。RM, pp. 90-101. 参照のこと。また、土屋恵一郎氏は、この『動機のレトリック』でのバークのベンサムの読解を通じてベンサム論を展開されており、本章はそれに多くを負っている。土屋恵一郎「法のレトリックあるいはメディアとしての法」『思想』昭和五十六年四月。

- (3) Bentham, op. cit. pp. 197-205. 参照のこと。尚、この例はバーク自身が提示している例でもある。PC, p. 189.
- (4) Bentham, "An Introduction to the Principles of Morals and Legislation," *The Works of Jeremy Bentham*, vol. 1, op. cit. 訳書「山下訳『道徳および立法の諸原理序説』」『世界の名著』ベンサム、J・S・ミル』（中央公論社、昭和五十五年〈四十二年〉）。

- (5) Bentham, *ibid.* pp. 48-49. 訳書一七七一―一七八頁。

- (6) ベンサムの指摘は「要するに」検閲の名称が論理学で言う論点先取りの誤謬を侵しているということである。cf. RM, p. 92.

- (7) Bentham, "The Table of The Springs of Action," op. cit. pp. 209-210. Burke, PC, p. 190.

- (8) Bentham, *ibid.* p. 210. Burke, PC, p. 190.

- (9) Bentham, *ibid.* p. 205.

- (10) PC, p. 159.

- (11) PC, p. 193. 参照のこと。

- (12) だが、バークはそれにかわって別の意味での「中立的」なことの存在を示唆している。バークの言う「中立性」は、社会の成員の利害や目的の一致、あるいは、倫理的判断の一致といった相対的中立性である。換言すれば、ベンサムにとって排除の対象となる未証明の倫理的判断が社会において共有されている時、それは「中立的」とされ、そうした性質を有することはバークは中立的なことばと捉える。PC, p. 193. そしてこの中立性実現の過程は対話の過程として捉えられ、ここにおいてバークの言うコミュニケーション論は、対話＝弁証法の過程となる。この時介在するのが「反抗 recalcitrance」という概念である。但し、この反抗という概念は、直接にはバークがリチャーズの提起した陳述と疑似陳述との絶対的対立を解消しようとする時、導入され論ぜられている。PC, pp. 255-261. 尚、次章、註(1)参照のこと。

(13) 以上の諸点については PC, p. 191. ならびに RM, p. 95. を参照のこと。

(14) バークがこのように言う時、また、彼が科学的方法を「機械のメタファで人間諸関係ならびに人間の動機を扱う試み」(科学機械論とバークは捉える)と批判する時、主として彼の念頭にある(あった)のはおそらくワトソンの S—R 理論——行動主義である。バークはワトソンの単純なレスポネント条件づけのみならず、後にスキナーのオペラント条件づけ等、新行動主義に対しても反論を加えることになる。PC, p. 303. (cf. pp. 11-14.) ならびに William H. Ruckert, *Kenneth Burke and The Drama of Human Relations*, (1963; University of California Press, second ed. 1982), p. 280. 参照のこと。尚「機械論と科学」へのバークの反論の社会学における継承については、H・D・ダンカン(中野他記)『シンボルと社会』(木鐸社、昭和五八年)特にその序論を参照のこと。

(15) PC, p. 75. cf. RM, p. 90.

N

(1)

ベンサム	オグデン・リチャーズ『意味の意味』*	リチャーズ『科学と詩』**
中立的名称	ことばの象徴的用法(科学的用法) ・対象の指示	陳述(科学的言説) ・真/偽(経験的に検証可能)
検閲的名称 ・称賛的 ・非難的	ことばの喚情的用法(詩的用法) ・感情の喚起の為の用法 ・指示とは無関係とされる	疑似陳述(詩) ・右記の意味での真偽とは無関係。 ・(但し「態度」の形成に役立つか否かで右記と区別された真偽を提唱)

\* C. K. Ogden & I. A. Richards, *The Meaning of Meaning*, (1923; Routledge & Kegan Paul, 1966) pp. 147-151. 参照。

訳書『石橋訳』『意味の意味』(新泉社、昭和五七年)二二三頁—二二七頁参照。

\*\* I. A. Richards, *Science and Poetry*, (Kegan Paul, Trench, Trubner & Co. Ltd. 1926) pp. 55-67. 参照。

ここでバークの立場がフィリップ・シドニーに始まる「詩の弁護」の変奏であることを強調しておかなければならないだろう。そこにあるのは科学対詩という対立の枠組である。そしてバークの「詩(的言語)の弁護」を考える上で是非とも言及されなければならないのはオグデン・リチャーズ、特にリチャーズである。ベンサムの場合と同様、彼らの思想、特にその言語分析の批判的摂取こそバークを語る上で欠かせぬ要因である。と同時に、バークに科学対詩の対立の枠組を考える出発点を提供しているのはリチャーズの諸著作である。右の表はベンサムならびにオグデンとリチャーズの言語分析をおおまかにまとめたものである。

バークは以上の対立を念頭に置いて陳述と疑似陳述との対立の解消を試みるが、これにはふたつの意味があると考えられる。そのひとつは日常言語が詩的言語であるという点の指摘である。もうひとつはカルナップらのいわゆる情動説の否定ないしはそれに対する反論である。つまり、価値言語に指示的意味を認める立場をバークは取っているということである。また、この解消の際、「反抗」という概念を介在させ、バークは科学的言語を含む全ての言説の妥当性をコミュニティの意見の一致にもとめているのだが、このあたりの彼の着想は(少なくともこの点に関しては)、パース、ミード、デューイらプラグマティズムの流れのなかに位置づけることができるかもしれない。

(2) PC, p. 265.

(3) バークはアナロジーないしはメタファが思考において果たす積極的(肯定的)な役割を認めている。これについても説明を要する点は多々あるのだが、ここではこの小論との関係で以下の点を指摘しておく。まず、ベンサムとの関連であるが、ベンサムはメタファが思考を誤りに導く点を指摘しているのだが、バークはかく言うベンサムの思考自体がその深いレベルにおいてメタファに支えられていることを逆に指摘してみせている。PC, pp. 193-194. バークはここから(とは言え、それだけで性急に結論づけているわけではなく、実際には『恒常と変化』全体、特にその第二部でのメタファについての考察があるのだが)人間の思考がメタファに支えられていると主張する。他方、メタファは言うまでもなく詩に不可欠の文彩である。従って、ここにおいて、人間の思考が詩的であるとのバークの主張が引き出され得ることになる。(これについては詩に深い造詣を持つ科学者ブロンフスキーの次のようなことと比較せよ。「象徴とメタファは詩にとって必要であるのと同様、科学にとっても必要なのである。」J. Bronowski, *Science and Human Values*, (1956; Harper & Row, 1975.) p. 36.) 更にバーク



クは、こうしたメタファの役割を認めた上で、自らの思考をその例外とせず、メタファ的思考を自らの方法論の一部に組み入れる。こうして引き出されたのが最後の引用部分での彼の主張である。きりがなくなるが、ついでに付け加えておくと、こうしたバークの方法の特徴はその使用言語にも表われている。つまり、バークはベンサムの唱える「中立的語彙」があり得ないと批判し、我々の使用する言語が「詩的」（価値的）であると認めた上で、自ら詩的言語でもって論述を進めてゆく。この特徴がバークを読みづらくしている原因のひとつなのだが、ここからうかがえるのは、自らの言説もまたコミュニケーション行為の一部であるとのバークの自覚である。換言すれば、批評という行為に必然的につきまとう一種の超越的立脚点への安住に對するバークの意識的な否定である。（この点についてはバークの科学に對する反論と比較のこと。）

(4) PC pp. 263-264.

#### 主要参考文献（註外）

Armin Paul Frank, *Kenneth Burke*, (Wayne Publishers, inc., 1969)

富山太佳夫 『テキストの記号論』（南雲堂、昭和五七年）

引用箇所については翻訳のあるものについてはそれを参照し、註にてその文献を明記した。但し、必要と思われたところには一部手を加えていただいている。また、イタリック体は傍点をふり、*・* ↓「*」*となっている。